

知っておくと書跡の作品をより楽しめる用語

**古筆** 広義には古人の筆跡ですが、狭義には平安時代から鎌倉時代初期にかけての古典籍、とくに歌集を書写した作品を指します。

**調度手本** 宮廷や貴族の間で贈答品として制作された古筆のことです。料紙、書、仕立てに至るまで神経が注がれ、筆者は当時一流の能書（書の巧みな人物）が選ばれました。

**断簡** 巻物や冊子に書写された作品が分割されたもので、「切」ともいいます。古筆の断簡は「古筆切」とよばれます。

**変体仮名** 明治三十三年（一九〇〇）に仮名が一音一字と定められ現在の平仮名が選ばれました。それ以外の仮名は、広く変体仮名とよばれます。古筆が読みにくいのはこの変体仮名が含まれるためです。

**連綿** 複数の文字を連続して書くことです。これを効果的に用いることで作品の芸術性が高まります。

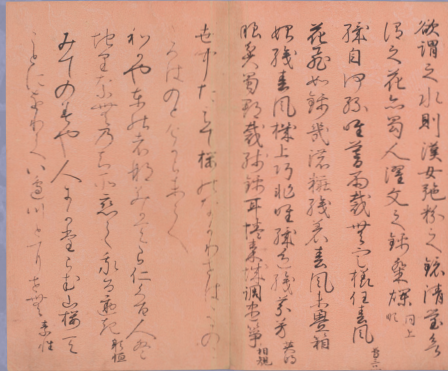
**散らし書き** 各行の行頭や行脚を揃えずに高低の変化をつける書きかたです。『源氏物語』に「乱れ書き給へる」とあり、その書を「をかしげ」や「美しげ」など、美しく感じられる様子が描写されています。

**料紙** 広義には書くための用紙全般を指しますが、狭義には加工や装飾をほどこした紙のことをいいます。

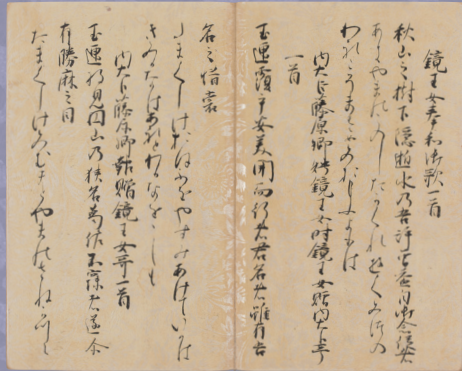
**唐紙** 本来は中国製の紙のことですが、平安時代に輸入された北宋製の装飾料紙をはじめ、それを模してわが国で制作されたものも含めて、版木による型文様を摺り出した料紙を指します。

**極札** 古筆の鑑定を生業とした鑑定家が、比定した筆者の名前などを記した小さな札のことです。「極印」という鑑定家の印が捺されます。

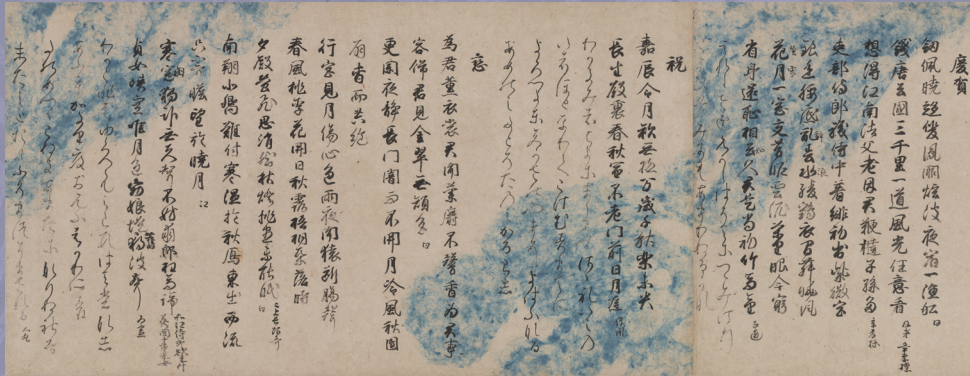
当館収蔵の他作品から平安時代の名筆をご紹介します



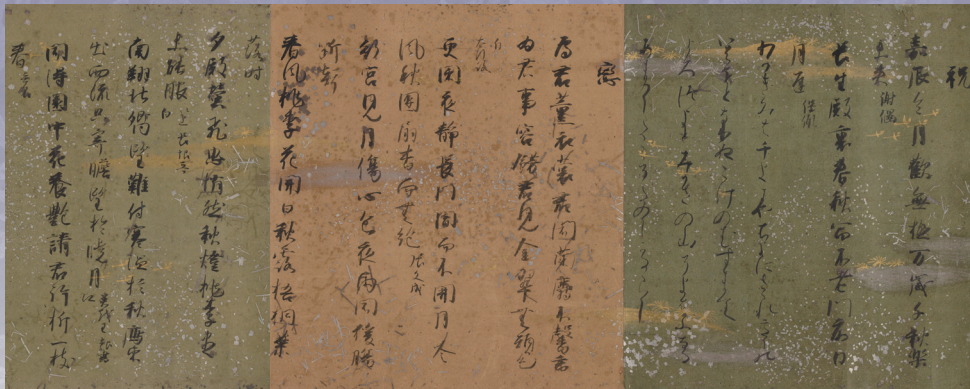
粘葉本和漢朗詠集 巻上 伝 藤原行成 11世紀



国宝 金沢本万葉集 巻第二 藤原定信 12世紀



国宝 雲紙本和漢朗詠集 巻下（部分） 伝 藤原行成 11世紀



安宅切本和漢朗詠集（部分） 伝 源 俊賴 12世紀

古今和歌集賀歌三首（大色紙）の楽しみかた  
和歌 × 書 × 料紙にあらわされる平安貴族の美意識



雲母摺り部分

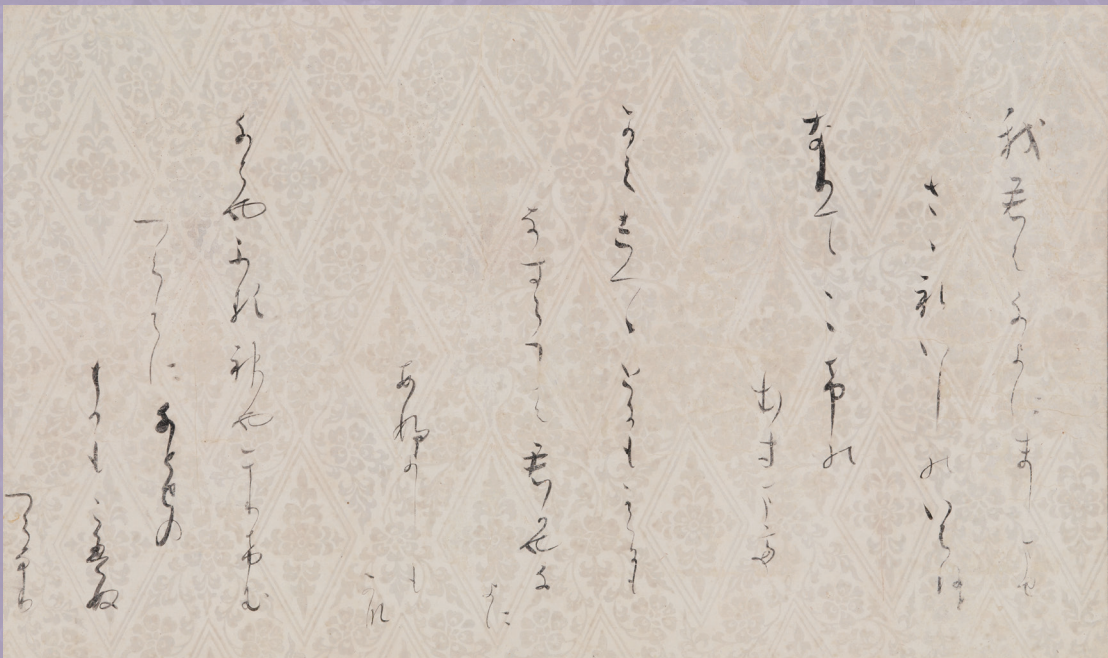
**料紙**  
文字を持たなかったわが国に中国の漢字が伝わったのち、平安時代に日本独自の仮名が完成しました。本作に用いられる料紙は、中国（北宋）製の唐紙が平安時代の宮廷や貴族に好まれたことから、それを模してわが国で作られたものです。日本独自の文様と考えられる二重菱唐草文が雲母摺り（雲母の粉末をふのりで溶いて木版摺りしたもの）されたこの上品な唐紙は、平安貴族の美意識が料紙にもあらわされたものです。鑑賞する角度を変えることで、より輝いて見えます。



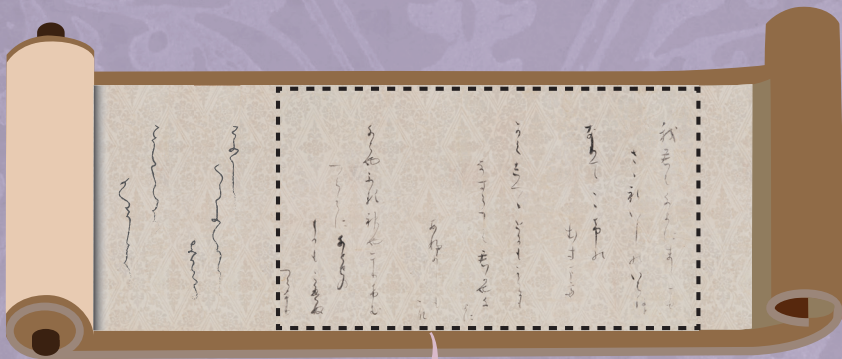
顕微鏡画像

## 書

本作の筆者は藤原公任（九六六～一〇四二）と伝わりますが、書と料紙の特徴から十二世紀の作と推定されます。能書（書の巧みな人物）が筆を執った調度手本と考えられ、線の太いところ細いところ、墨継ぎ、連綿、散らし書き、余白といったさまざまな書の要素を巧みに生かした見事な紙面構成を見えています。筆の跡をたどると、一文字のなかでも一行のなかでも自在に太さやリズムが変化しています。本作は三分分の断簡ですが、一首ごとの「大色紙」「中色紙」「小色紙」が生まれたのは、このような書の美が一分においても成立していたからにほかなりません。



古筆了榮極札  
「四條大納言殿公任卿（我君は／＼巻）」



以前の姿（イメージ）

## 古筆切とは

本作は、付属する極札から、寛文五年（一六六五）頃は「我君は」に始まる巻物であったこと、寛政十年（一七九八）には現在のような三分分の断簡となったことがうかがえます。現存する作品は、本作を除いて一首ごとの断簡で知られ、大きさによって「大色紙」「中色紙」「小色紙」とよばれます。茶の湯の隆盛により江戸時代には茶席を飾る古筆切の蒐集が流行しましたが、本作もそのような需要によって三分分となったものと推測されます。なお、古筆切の極札に記される筆者名は、実際の筆者と異なることがほとんどです。

四條大納言公任卿 我君は  
秋三首 戊午五



現在の姿

## 和歌

『古今和歌集』巻第七 賀歌から三四三、三四七、三四八番歌が書写されています。賀歌はおもに長寿を祝って詠まれた歌です。

### 【釈文】

我君は千よにましませ

さゝれいしのいはとなりてこけの

むすまで

### 【現代語訳】

あなたは、千年も万年もおすこやかに長生をお保ち下さい。細かい石が大きな岩となつて、昔が生えるさきさきまでも。

かくしつゝともかくにも  
なからへて君かや千  
よに  
あふよしも  
かな

このように今日は祝宴を設けて、あなたの七十の賀を祝っているが、私もどうかして生きながらえて、さらにあなたの八千代の賀の宴にめぐり逢いたいものだ。

千はやふる神やきりけむ  
つくからに千とせの  
さかもこえぬ  
へらなり

この杖は、神様が伐つてお造りになったものでしょう。これをつくときめに元氣が出て、千年の齢の坂さえも越えられるようでございます。

※奥村恒哉校注『新潮日本古典集成（新装版）古今和歌集』（新潮社、二〇一七年）に拠る。